

篠栗街道物語(前編)

篠栗の地名としての登場は、長禄2年(1458)の文書の中に「西郷篠栗給所」という表記があります。

さて、江戸時代に篠栗の地名を最も有名にしたのが、「篠栗街道」でしょう。別名では「篠栗往還」・「篠栗道」・「金出道」とも呼ばれ、福岡から飯塚までの約26kmをつなぐ道を指しています。黒田如水・長政親子が筑前入国した翌年から、すでに本格的な整備が始まり、八木山(展覧台付近)には、如水が改修したとされる石坂(別名、明神坂)の石畳道も残っています。

さて、慶長5年(1600)、黒田家人入国後、篠栗街道の整備が比較的早く実施されたのには、次のような理由があります。

黒田家は関ヶ原の戦いなどの勲功によって、加増されて豊前国から筑前国へ転封となりました。入国には、中津城から飯塚を経由して、小早川秀秋が居城としていた糟屋郡名島城を目指しました。これを「筑前御討入り」と呼び、篠栗の旧道を意気揚々の姿で行軍しながらの入国だったことでしょう。しかし、旧所領であつた豊前国に戦争勃発の火種を残しての到着だったのです。

黒田家の異動に伴い、豊

前国には丹後国から細川忠興が入国してきました。こちらでも領地を増やされての入国であり、新しい国造りに期待を膨らませての入城でした。

細川家は旧所領の年貢米は後任の領主に引き継ぐものとして、いったん米を農民に返し、入国してきました。当然、赴任した豊前国では引き継ぎがあるものと考えていましたが、到着してみると、5万石納められているはずの年貢米が米蔵には入っておりません。武家の作法を守っていないとして、即刻、黒田家へ抗議を行ったのです。黒田家はこの抗議に対し、次のように答えたといわれています。

「私のところ(筑前国)も以前の領主であつた小早川家が米を持っており、たいへん困っている。同家から米の返還があれば、そちらにもお返ししよう」また、「そちらが困りなら少しづつ返納しよう」という返事だったので、このような自分勝手な言い分に細川家も納得するはずもなく、何ら譲歩を見せない黒田家に対して怒り心頭に発し、黒田家の船が関門海峡を通過する際、積み荷を差し押さえるといった強硬手段を取らざるを得ないようになってしまいま

した。時代は戦国時代の末期、まだまだ戦乱冷めやらぬ時期であり、まさに、両国は「いざ紛争へ」とする緊迫した関係となつてしまったのです。

幸い、他藩領主の仲介によつて戦争は回避されましたが、以後も両藩の不仲が続いていくこととなります。当然、黒田家も黙って見ているはずもなく、豊前国との国境にのみ、六つの城(六端城という)を築きました。また、戦争ともなれば、名島の地から人員や物資を国境まで輸送しなければならず、豊前方面への主要幹線の整備も急がせました。

このように紛争を契機として、領内の街道整備が早められた訳です。歴史の裏側にこんなドラマが隠されていたことをあなたは存じでしたか。「甲編へつづく」

※文中の敬称は略しています。

※参考文献

「物語福岡藩史」文献出版

「街道と宿場町」海鳥社

町文化財専門委員

新宅 信久

